

聖書：ピリピ 1：8～11

説教題：義の実に満たされ

日時：2016年11月6日（朝拝）

「喜びの手紙」と呼ばれるピリピ人への手紙。1章3～4節でパウロはこう述べました。「私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り」。パウロにとってピリピ教会は喜びの教会でした。彼らのことを思うごとにパウロの心には喜びが満ち溢れました。いかにパウロとこの教会の関係が良好なものであったかは前回見た通りです。彼らは福音を聞いて受け入れた最初の日から福音を広める働きに献身する教会となりました。パウロがピリピにいる時だけでなく、その後もずっとパウロを支援し、助けた教会でした。各地で福音を弁明し立証している時も、今ローマで投獄されている時も、彼らはパウロと共に福音のために自分自身をささげてくれました。パウロはその彼らを思う時、彼らの内に良い働きを始めた神が、キリストの再臨の日に向かって確実に救いのみわざを成し遂げてくださることを確信せざるを得ませんでした。しかし注目すべきは、パウロはただ喜んでいただけではないということです。パウロは彼らのためにいつも祈っていました（4節）。その内容が今日の9～11節に示されています。

パウロはピリピ人たちを本当に慕っていました。それは人間的な思いではなく、8節に「キリスト・イエスの愛の心をもって」と言われています。これは直訳すれば「キリスト・イエスのはらわたをもって」という表現です。パウロはキリストと一つに結ばれている者として、キリストと同じ愛の心でピリピ人たちのためにとりなし続けました。その彼らへの思いが真実であることを証しするために、「そのあかしをしてくださるのは神です」とまでパウロは言っています。これは神の前での誓いです。軽々しい誓いはすべきではありませんが、自分の語ることが真心からのものであることを証しするために誓いをすることは聖書で認められており、良いこととされています。

さて、そのパウロはピリピ人たちのためにどんなことを祈っていたのでしょうか。すでに称賛に値するピリピ教会のためにパウロがこのように祈っていたということは、私たちにまだまだ取り組むべきことがあるということを示しています。私たちにはもっと目指すべき上があるということです。決して今の状態に自己満足して、向上心をなくしてしまってはならない。このパウロの祈りを通して、私たちは何を自分のために祈り、

課題とすべきか、また他の人のために何を祈るべきかを教えられ、その実践へ導かれた
いと思います。

ここでのパウロの祈りは大きく2つの部分に分けて見るができると思います。ま
ず一つ目の祈りの中心は「あなたがたの愛がいよいよ豊かになりますように」。ここに
私たちは改めて「愛」について自分は祈り求めなければならないことを教えられます。
自分のお金や生活のこと、健康のことばかりを祈ってはならない。果たして「愛」
はそんなにも追い求めるべきことなのでしょう。確かにキリスト教の中心は「愛」で
あると言われます。そして御言葉を思い起こせば確かにそうです。Iコリント13章13
節：「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐ
れているのは愛です。」 またイエス様は律法学者から「すべての命令の中で、どれが
一番大切ですか」と尋ねられた時、律法を要約して、「神を愛せよ」と「隣人を愛せよ」
の二つであると言われ、どちらも「愛」でまとめられました。またガラテヤ書5章に出
て来る「御霊の実」のリストでは、そのトップに「愛」が出て来ます。改めて愛がキリ
スト教の最重要な事柄であること、従って私たちが追い求めるべきものであることが分
かります。

しかしこの「愛」とは何でしょうか。私たちはロマンティックな愛、感情的な愛、人
間同士の恋愛のようなことを連想するかもしれませんが、聖書における「愛」の基本は、
何と言っても神の愛でしょう。神の罪人に対する愛です。ご自身の大切な一人子さえ十
字架につけるほどの人知を超えた圧倒的・衝撃的・犠牲的な愛です。これを映し出す愛
があなたがたの内に豊かになるように！とパウロは祈っているのです。だとすると、そ
の次に「真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり」と述べられている
のも、至極当然だと納得できます。先に述べたように「愛」というと、私たちはロマン
ティックな愛、感性的な愛を連想しやすいかもしれませんが。しかしここで愛は知識によ
って豊かになると言われています。「愛」と「知識」。これらは私たちの頭の中では相反
する事柄のように思われるのではないのでしょうか。愛は暖かく、知識はどちらかとい
うと冷たい。しかしパウロはここで、愛は知識とともに進むと言っています。知識のない
愛は本当の愛ではない。この知識とは何でしょうか。ここでは「真の知識」と強調して
訳されていますが、私たちが知るべき真の知識とは神知識、神を知る知識のことです。
つまり私たちは神ご自身を益々知ることを通して愛するとはどういうことかを学ぶ
のです。愛の源である神ご自身を知ることなしに愛の人にはなれないのです。そうでは

ない愛は、人間的で、自分勝手に、自己中心的な愛にしかならない。しかし神を知れば知るほど、私たちは愛とは何かを知り、その愛において成長するように導かれるのです。もちろんここでの神を知る知識とは、単なる頭の中での知識という意味ではなく、神との交わりの中で神ご自身を知って行くということです。

また「あらゆる識別力によって」とも言われています。これは簡単に言えば「洞察力」のことです。神の御心をわきまえ知ることです。様々な状況においてどうすることが神の御心なのか、事細かに聖書に記されているわけではありません。私たちはその時、聖書の基本的真理に基づく洞察力、判断力が必要になります。この洞察力を持つこととセットで、私たちの愛はより豊かなものへと導かれるのです。聖書には良く考えずに愛するという道はありません。「愛」と「良く考えること」は手を取り合って進むのです。

さて、こうした取り組みが向かう先にあるものは何でしょうか。それが 10 節前半にあります。「あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになります。」これが一つ目の祈りの目標です。私たちは毎日の生活の中で色々なものに囲まれています、その中で何を大切なものと考え、何を選び取って行くかは人生の分かれ目になることでしょう。ただ周りにあるものに翻弄されて生きるだけなら、本当の自分の人生を生きることはできません。ただコマーシャルや公告を見て、あれが欲しい、これも欲しい、またああんりたい、こうなりたいと踊らされて一生を費やすなら、それは自分というものが無い、ある意味で無駄な生き方でしょう。大事なことは、多くの情報がある中で真に大事なものを見分けること。そしてそれに集中することでしょう。そのためには重要でないものはそこに放置し、ある意味で無視し、関わらないということが大事です。私たちは真に大事なものを忘れて、自分のエネルギーを第二、第三のことに注ぐべきでしょうか。そうではなく真にすぐれたものを見だし、それを選び取る祝福に生きるべきではないでしょうか。

一つ参考になる箇所として、ルカの福音書 10 章のマルタとマリヤの話があります。あの箇所でイエス様はマルタに「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを心配して、気を使っています。」と言われ、「どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。」と言われました。マルタが心にかけていた多くのことは、それ自体悪いことではありませんでしたが、イエス様はもっと大切なことがあると言われました。それを後回しにして、他のことで心を一杯にしたために、マルタはついに爆発し、周りの人に当

たり散らしてしまいました。そんなマルタにイエス様は、あなたは大切なことを選んでいなかったから、そうなったと穏やかに叱責されました。私たちは果たして、その選ぶべき大切なこと、イエス様がどうしても必要なことと言われる真に大切なことを選び取れているでしょうか。あるいはパウロはこの後、3章8節でこう言っています。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、云々」。パウロはキリストを益々知ること、すなわちその復活の力を知り、その苦しみを知り、その死と同じ状態になり、死者からの復活に達するというキリストとより深く結び合わされることに比べたら、他のいっさいのことはちりあくただと言っています。その他のことはゴミ同然。ほとんど無価値であると。だから私はこの一事に励んでいます、この一つのことには全エネルギーを注いでいますと3章13節以降で証します。果たして私たちは毎日の生活の中で、そのように真に選ぶべきものを見分け、そこに生きているでしょうか。これは簡単なことではありません。そのためには、パウロが祈ったように、私たちの愛が知識とともに成長する必要があるのです。いわゆる愛だけがあって知識がなければ、このようにすぐれた道を選択して進む生活はできません。また知識だけがあっても愛がその人を形作っていなければ、同じようにこの真の祝福の道を進むことはできません。ですから私たちは愛が、神を知る知識と共に益々豊かになることを求めて行かなければならないのです。

さてもう一つ、今日の箇所に記載されている大きな祈りは、10節後半から記されています。パウロはここで「キリストの日には」と言っています。すなわちパウロはただ目の前のことばかりを祈っていたのではなかった。彼はこの祈りが、キリストの日、すなわち主の再臨の日・救いの完成の日に、どういうゴールに達するかも見ていた。つまりパウロは今ここでの取り組みがたどり着く最後の日のビジョンについて語っているのです。まずパウロが言っていることは、キリストの日には「純真で非難されるところがない」ということです。「純真」という言葉は「太陽の光」という言葉が来ていると考えられます。すなわちその光に照らされても汚れが見つからない。透き通っていて、混じり気がない。それゆえ、非難されるところがない。私たちは果たしてこんなことが私に実現するのだろうかと思います。とても私には起こらないことではないのかと。しかしキリストの日にはこういう者になるということが、神が私たちに備えてくださった救いの内容なのです。また11節には「義の実に満たされている者となり」とあります。非

難されるところがないばかりか、義の実をたくさん結んでいる者として神の前に出るのです。これは聖化の道のりを進んだ結果として、私たちの内に結ばれる素晴らしい実のことです。神が見て賞賛するような性質のことです。私たちはそういう義の実を持つ者となる。しかも一つ二つではなく、「満たされている」というほどたくさんに、ということ。果たしてそんなことが私たちに実現し得るのでしょうか。ですからここに「イエス・キリストによって」と書かれています。自分を見る限り、とてもこんなゴールに達しそうな気がしません。しかし実がなるための源はイエス・キリストです。この方と結ばれることによって、私たちは実を結ぶ者とされるのです。ぶどうの木と枝のたとえのように、まことのぶどうの木であるイエス様につながっている私たち枝には、幹の命そのものが流れて来ます。そしてやがて時が来て、実を結ぶのです。大切なのは、このキリストの日における私たちの姿についてのビジョンをしっかりと持つことです。

それゆえ、最後に「神の御栄えと誉れが現わされますように」と祈られています。6節で見ましたように、私たちの内に良い働きを始めてくださった神が、キリスト・イエスの日にこの完成へと導いてくださいます。ですからすべての栄光は神に帰されるのです。前回触れましたように、この神の働きは私たちの努力と矛盾しません。この手紙の2章13節に、「神は私たちに志を与えて、事を行なわせる」とあります。神がすべてを導いてくださるのですが、その方法は私たちに志を立てさせるというプロセスを通るのです。ですから少し意地悪い言い方をすれば、神が働いて下さるのだから私は何もしないとって怠惰な状態にいる人は、それによって神は私に働いていないということをも自分自身で証明していることになるのです。神は決して私たちをダメな人間にはしません。私たちが自分の意志で積極的に取り組むことと調和する形で事を導かれるのです。こうしてかの日に義の実で満ちている私たちは、自分を誇ることはしません。自分がここまで導かれたのはただ神の奇跡である！神の恵みである！と言って神をたたえるのです。私たちを通して神の栄光が豊かにほめたたえられるのです。

私たちは果たしてこのビジョンを胸に抱いているのでしょうか。イエス様を信じ、救いを頂いて以来、全然成長していなくても、やがて何とか天国に入れて頂くというのが私たちが持つ見通し・ビジョンではありません。私たちは神を知り、愛を持つ者とされていますが、その愛はもっともっと成長・発展していくべき状態にあります。そのために益々神を知り、洞察力を持ち、真に大事なことを選んで行く歩みが必要です。そうした取り組みを経て、キリストの日には純真で非難されない者、義の実で満ちている

者とされる。私たちはこのような自分の将来を思い描いているでしょうか。これが私たちが持つべき自分についてのビジョンなのです。私たちが信じるべき約束なのです。神がこのことを私たちの内に成し遂げてくださるのです。私たちは神に感謝し、このビジョンを告白して、その日に向かう歩みを祈り求めたいと思います。自分のためにも、兄弟姉妹のためにもこのことを祈りたいと思います。そしてやがての日にはそのように導かれた自分を発見して心から驚いて、神に感謝し、神に栄光を帰す歩みへ向かって行きたいと思います